「韓国の壁を乗り越えれば世界の『上』も狙える」

五輪から遠ざかっていることもあり、女子ハンドボールが話題に上ることは少ない。しかし、世界トップ10前後で奮闘しており、13年には女子代表の愛称「おりひめジャパン」も決定。16年リオ五輪の出場権を虎視眈々と狙っている。レフティーの点取り屋として世代別代表から活躍。海外経験も豊富な元女子日本代表・早船愛子氏に聞いた。

▽早船愛子（はやふね・あいこ）80年1月23日生まれ。富山県出身。氷見高から筑波大。実業団のシャトレーゼ、クラブチームの三重バイオレットアイリスでプレー。デンマーク、スペインでもプレーした。今年3月に現役を引退。4月から独立行政法人・日本スポーツ振興センターに勤務。

――ハンドボールとの出合いを教えて下さい。

「出身地の氷見市はハンドボールがとても盛んでした。小学4年から地元クラブでプレーするようになり、中学では体操部か新体操部に入ろうと思っていたのですが、結局はハンドボールを続けていました（笑い）。高校2年でジュニア日本代表合宿に呼ばれ、イタリア遠征にも帯同しました。世界を知るにつれて海外志向が強まりました」

――デンマーク、スペインでプレーしました。

「アパートに一人で暮らし、自炊しながらプレーを続けました。そもそも海外で生活してみたいという思いもあり、長いオフがあるとホテルも決めず、飛行機の便も決めずに北欧を回ったり、パリからロンドンと欧州各国首都巡りをしたり、異国を十分に堪能しました」

――日本女子ハンドボール界の現況を教えて下さい。五輪は76年モントリオール大会が、最初で最後の本大会出場です。

「ライバル韓国の牙城を崩せず、たまに勝っても中国に足をすくわれてしまったり…。どうしても《韓国に負け続けた40年近い歴史》が体中に染み付き、それが五輪予選敗退につながっていると思います。現在の実力は世界の10位前後だと思いますが、韓国という壁を乗り越えれば、ひと皮むけてアジアのトップから世界のベスト8を、ベスト4を、さらにその上を狙えると確信しています」

――レベルアップのために海外でのプレー経験はプラスになりますか？

「海外で強く感じたことがあります。外国人選手は《ここが踏ん張りどころ》を本能的に知っており、それを結果に結びつけている。さらに《自由な発想でプレーしていいよ》と言われると想定外のプレーをしてくることがあります。日本人選手は《パターン1、2、3の中から選びなさい》には上手に対応できるのですが、個人の発想力が求められた時に、ここぞという時に力をフルに発揮できないことが少なからずあります。そうしたマイナス部分が、海外での経験によって埋まる可能性はあると思います」

――名刺に「日本スポーツ振興センター女性競技種目戦略的強化プログラム プログラムマネージャー（ハンドボール）」とあります。

「文部科学省の委託事業である女性アスリートの国際競技力の向上を図るためのモデルプログラムを戦略的に、かつ実践的に策定して女性アスリートの育成を図る――という仕事に携わっています」

――最後になってしまいましたが、ハンドボールの魅力を教えて下さい。

「走・跳・投の魅力に加えて格闘技的なフィジカルコンタクトの激しさもあり、とてもエキサイティングな競技です。会場に一度おいで下さい。その魅力を存分に分かっていただけると思います」

（次回4回目は16日発売号＝17日付号に掲載）

©六川則夫